（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　　名　　秋草　俊一郎

本論文は、ロシア語と英語の両方で執筆したバイリンガル作家、ウラジーミル・ナボコフ（Владимир Набоков / Vladimir Nabokov）の著作について、英語版とロシア語版の比較対照をもとに、特に「自作翻訳」（自分の作品を自ら他の言語に翻訳すること。ここでは共訳者がいる場合も含む）という側面に焦点をあてて研究したものである。

ナボコフはロシア出身だが、1940 年にアメリカに移住した後、主要な執筆言語をロシア語から英語に切り替え、英語作家として国際的な名声を得た。そのため従来、日本では「ロシア出身のアメリカ作家」として英米文学の専門家によって研究されることが多く、二言語にわたる創作・翻訳の全体像に迫るようなアプローチは稀だった。本論文はロシア語と英語の両方のテキストを丹念に読み比べ、自作翻訳における微細な異同や改訂にまで注意を払いながら、言語に関して極めて意識的な作家の創作方法の特質を解明している。

論文は序章と終章（結論）のほか、6 つの章および補章・資料編から成っている。論文の本体を成す 6 つの章のうち、まず第一章は熟語レベルでの対照観察に基づき、ナボコフにおけるロシア語と英語の間の文体論的相違を明らかにした。第二章は短編「報せ」の英訳における姓の追加という一見些細なディテールから出発して、作品の歴史的文脈やユダヤ人問題へと論を展開する。第三章は短編「重ねた唇」のロシア語原文と英訳の丹念な比較を通して、テキストに埋め込まれた仕掛けを発見した。第四章は長編小説『ディフェンス』のロシア語原文と英訳の双方を読み比べながら、小説の本当の主題が父子の関係の問題であるとする見方を提唱し、ナボコフ文学におけるモラルの問題へと視野を広げた。第五章は英語で書かれた長編『ロリータ』をナボコフ自身によるロシア語訳と比較しながら、作中に現れるフランス語の扱い方の違いを手がかりに、作品のモラルや作家のアメリカ観を論ずるための道を探った。第六章はロシア語の植物名「チェリョームハ」（和名エゾノウワミズザクラ）を英訳するためにナボコフが積み重ねた並外れた努力を追いながら、彼にとって翻訳が何を意味するものであったのか、考察した。

テキストの細部の読解に際しては語学的に不正確な点も散見され、今後さらに文体論的分析の精度を高める必要があることは否定できない。また自作翻訳という主題については、従来の翻訳研究全般の蓄積を踏まえて、さらに広い視野から理論的に位置づけていく努力も求められる。しかし、本論文はロシア語版・英語版の比較対照を通じて、従来の作品解釈に変更を迫るような数々の新発見をもたらし、ナボコフの自作翻訳が決して副次的なものではなく、独自の価値をもったテキストとして研究に値することを明確に示した点で画期的である。

したがって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断した。